

さい。もう、決して多い少いといつて喧嘩はしやせんから』すると、猿先生は

『喧嘩しないなら、始めからしないが、いゝじやないか、裁判にもち出したからは、裁判官は、どこまでも公平に、分けてやらねばならぬ』

といつて、二片の肉を、秤つて見ては、ちぎり秤つて見てはちぎりして、とう／＼、残りがなくなりそうになつて、しまつたので、二匹の猫は、も一耐らなくなつて、『どうか少くつてもいゝから、せめて、其残りを、分けて下さう』と願つた所が『いや、この残りは裁判をした賃に、私が貰つて置くのだ』といつて、一頬張りに残りの分も食べて仕舞ひましたと。

いそつぷ物語

其冊一 狐と山羊

一匹の狐が、深い井の中に落ち込んで、上ることができないで難儀して居る處へ喉が渴いた／＼といひながら、一匹の山羊がやつて来て、ひよいとい、其井の中をのぞき込んで見て、狐に、井の水が、いゝか、どうかと尋ねました。狐は、自分の辛い事は隠して態と、愉快相に、水は餘程奇麗だし、冷たいから、すぐ下りて来て飲んで見玉へ、と下からいひました。山羊は、も一水飲みたい一方で、他の事は考へる暇なしに、すぐ飛び込んで、先づ一口飲んで見た。そこで狐は、始めて、此井から上ることの難しいといふことを話して、さて申しますには、

「そこで、どうかして、吾々はお互に助け合つて上らねばならん。だから、まづ、君は兩足を、此井の壁にもたせかけて、頭を下向けにし給へな。僕は、君の脊中を臺にして、上に飛び出るから、其後で、又君を助け出すことにしよう。」

仕方なしに、狐のいふ通りになると、狐は、早速山羊の脊中から、角に足をかけて、ぴよいと、井の外に出て、それなり、行かうとしますから、山羊は、「夫では約束が違ふじやないか」といつて、狐を責める、すると狐は、ふり返つて

「君も、餘つ程馬鹿だなー、一體君が、其顚の顚はども頭に脳髓を持つてゐるなら、上り道を知らないで下りて來るといふことはあるまい。逃げ道の工夫をしないで置いて、危険い所へ這入るなんて、そんな馬鹿なことがあるもんか」

這入ル前ニハ、ヨク氣ヲ付ケヨ

其卅二 鳥と白鳥

或時、鳥が、白鳥の羽毛のいかにも奇麗なのを見て、どうかして、自分も、あの通り奇麗にしたものだとかへた末、一體、白鳥は、毎日く水につかつて、洗つて居るので、夫であんなに、美しくなつたのだから、自分も、其通りやつて見ようと、考へ付いて、とうく巢から飛び下りて、川の中へ宿代をしまった。

そこで、毎日毎晩、水で洗つて居たけれども、いつまでたつても、黒い羽毛が白くならない、其中に、食物がなくなつて、おしまひに、死んでしまひましたとさ。

天性ハ習慣ニヨツテ代ヘルコトが出来ナイ

其卅三 渴した鳩

一羽の鳩がかりました。非常に喉が渴いて居た時に、看板の畫にある盃に水の入つてゐるのを見て、繪だとは知らないで、いきなり、夫を目かけて、烈しく飛んで行つたので、イヤといふ程板へ、身体をぶつ付けて其爲に、羽を挫いて、地面に落つこちて、とう／＼通りかゝりの人に捕まりましたとさ。

思慮ニ過ギテ狂熱ニ走ツテハ不可ナイ

慈悲深い天子

アウストリアの天子で、ヨセフ第二世と申しました方は、大層な慈悲深い、親切な方で居らした相です。

ある日のこと、此天子様は、ウ井ーンの市街を、普通の紳士の様な姿をして、御散歩なすつて居

ました所が、年頃十二許の可愛い男の子が、オヂ／＼と、何か、言ひたさうに近ついてきました。夫と見て、紳士は

「お前、何か欲しいものでもあるのかい」と咄しかけたが、其聲が、いかにも優しくつて、様子が、どこまでも親切相なので、子供は、とう／＼思ひ切つて言ひ出しました。

「私は、御願があります、貴下は、屹度聞いて下さるでしょうね」紳士は

「そりや、聞いてやらうよ、けどもお前何が、欲しいの？ お前、乞食じやなからう、物の言ひ方や、お前の様子で分るが……」

「私は、乞食じやありません」

といつて、子供は、何を思ひ出したか、急に悲しくなつてきて、兩方の眼から、大きな涙を、ぽろ